Tulips University of Tsukuba Repository

# 〈研究論文〉年少者用SPOTの開発 ： 問題作成とインターナショナルスクールにおける試行

| | |
|---|---|
| 著者 | 酒井 たか子 , 河野 あかね , 小林 典子 |
| 雑誌名 | 筑波大学留学生センター日本語教育論集 |
| 号 | 30 |
| ページ | 21-33 |
| 発行年 | 2015-02-28 |
| その他のタイトル | 〈Research Articles〉Development of a SPOT for childeren and adolescents : the creation of test items and a trial run in an international school |
| URL | http://hdl.handle.net/2241/00125038 |

# 年少者用SPOTの開発

## ―問題作成とインターナショナルスクールにおける試行―

酒井　たか子　　河野　あかね　　小林　典子

**要　旨**

多言語背景の児童の日本語の学習言語能力を客観的かつ簡易に測定するために、これまで成人外国人学習者を対象に研究を進めてきたSPOTを利用して年少者を対象としたSPOTを開発した。テストは、日本の小学校１年から６年の国語の教科書から学習言語能力を問うための32問を選び出しテスト項目を作成した。本テストは用紙版で行ったが、練習時間を入れて10分以内で実施が可能である。予備調査を行った後、インターナショナルスクールで２年生から10年生の75名の児童・生徒に試行した結果、小学校１年生からSPOTのテスト方式は使用可能であり、得点と総合的な日本語力の間に高い相関が見られ本テストの有効性が示唆された。また、日本語での授業がどの程度理解できるのか、学年別に得点との関係を示した。

【キーワード】日本語学習言語能力測定　年少者　多言語背景　SPOT

# Development of a SPOT for children and adolescents : the creation of test items and a trial run in an international school

SAKAI Takako, KONO Akane, KOBAYASHI Noriko

【Abstract】 In order to provide an objective and easy assessment of the Japanese ability of children from multi-lingual backgrounds, we developed a SPOT for adolescents based on the SPOT for adult second-language learners of Japanese, which has been the focus of our research to this point. We prepared the test featuring 32 items testing the target language culled from Japanese language arts textbooks used from the first to sixth grade in Japanese elementary schools. It is possible to administer the test within a 10 minute span. Following a pilot study, we administered the test to 75 students from second to twelfth grade classes at an international school. The results indicate that the test is usable with children from the second grade up, and that there was a high correlation between scores and comprehensive Japanese ability.

【Keywords】 assessment of Japanese language ability, children and adolescents, multi-lingual backgrounds, SPOT

## 1．はじめに

多言語背景の児童は、インターナショナルスクール、日本語補習校、日本の帰国子女学級など横の移動も多く、日本語力を知るための共通スケールの必要性が求められている。近年は、年少者向け評価・測定として様々な試みがなされており、対面で実施する多言語対話型評価の充実は注目に値する。DLA（Dialogic Language Assessment）は、文部科学省が東京外国語大学留学生日本語教育センターに委託開発している[1]もので、小・中学校で授業に参加するために必要な学習言語能力の発達状況を対話を通して探る方法により、話す、聞く、書く、読む、の４技能の面における評価を、またOBC（Oral Proficiency Assessment for Bilingual Children）は語彙カードとタスクカードを用いたインタビューにより、日常会話レベルから学習言語レベルまでの話す力の測定を行う（中島2003ほか）。JSLバンドスケールは、学習の様子、先生とのやりとり、クラス活動や遊びの様子などの観察から、言語使用の特徴をバンドスケールのレベルと検討し、日本語能力のレベルを判断しようとするものである（川上2003）。これらは、児童・生徒一人一人と対面でのやり取りや観察を通して丁寧に日本語の段階や特徴をとらえることができる。しかし一方で、テスターの事前のトレーニングが必要であったり、測定に長い時間がかかるなど、実際に児童・生徒を持っている現場としては活用しにくい面がある。そこで筆者らは、客観的かつ簡易に日本語力を診断できる年少者用のテストとして、これまで成人用の日本語学習者用に開発してきたSPOTの形式を利用したテスト開発を進めてきた。本稿では、問題の作成の経緯と、実用化に向けてインターナショナルスクール等で実施した結果について報告する。

## 2．年少者用SPOTの作成

### 2．1　SPOTについて

SPOTとはSimple Performance-Oriented Testの略称で、その名のとおり、単純な解答形式で短時間に受験者の言語運用能力を推定するための日本語のテストである。各問題文（1文）の平仮名１文字分の空欄に同じ文の音声を聞きながらその平仮名を聞き取って解答するというテスト法で、各問題文は１回だけ自然な速度で読み上げられ、即時的な解答が求められる。解答用紙には、例えば次のような文が数十問並んでいる。

① この　ふねは、さかなを　とる　ため（　）ふねです。
② 学習を通（　）て知ったことや感じたことを振り返る。

自然な発話の中では文字の通りに物理的に明瞭な音声で発話されているわけではなく、人は頭（言語能力）を使って聞き取るという聴取の認知的な仕組みを利用して小林とフォード丹羽によって発案されたものである（小林・フォード、1992、小林・フォード・山元、

1996 等)。また、解答には文字をすばやく目で追う能力も必要である。聞きながら、読みながら、空欄の文字を素早く書き取るためには、その問題文の日本語をゆっくり考えながらでは失敗する。このような読み、聞き、書きを同時にする「ながら作業」は母語話者にとっては難しいことではない。それは、意識的に考えながらの処理ではなく、自動的に処理しているからである。問題文は用紙版では2秒間隔で、次々と読み上げられていく。作成した問題文の日本語に対してどの程度自動化しているかが得点と関係するため、運用力を間接的に推定できると考えている。通常は問題文数60～90程度でテストを構成することが多いが、本稿の子供SPOTでは32問を試行した。

酒井・小林（1999）は日本の公立小学校の3年生と5年生を対象に、大学生の留学生向けに作成したSPOT（B, C, D, E版）を試行したところ、年齢的には3年生でも十分に使用が可能であることが分かった。しかし、児童には不適切な語彙があるため、児童を対象とする場合には語彙を検討することが必要だと述べている。そこで、年少者を対象とした問題項目によるSPOTの開発を始めた。

### 2.2　対象者

多文化・多言語背景を持ち、日本語支援の必要な児童・生徒を対象とする。具体的には、帰国子女や日本で生まれ日本の学校に在籍している外国籍児童・生徒、海外日本人学校、海外補習校、インターナショナルスクール、ブラジル人学校などに通う生徒などである。

### 2.3　問題作成手順

テストの問題項目の選定のために、国語の教科書（東京書籍）の各学年上下巻2冊のうちの下巻のみ計6冊の全部の中から、方言、古文を除いた現代語の文法項目のうち、友人との遊びなど日常的に会話で使用する生活言語ではなく、学習言語特有の文法項目を日本語教師の判断で抜き出した（111項目）。テスト項目として語彙も考えられるが、従来のオリジナルのSPOTが文法項目を問題としているため、子供にもこれが有効かどうか確認する目的もあって、文法項目とした。下巻だけとしたのは、問題作成の省力化のためで、目的がテスト問題30項目程度を選択するためだったからである。また、上巻に出現しているものは、下巻のどこかにも出現するだろうと考えた。表1はそれら文法項目の個数を新出学年ごとに示すものである。

**表1　学習言語特有の文法の新出学年項目数**

| 学年 | 1年 | 2年 | 3年 | 4年 | 5年 | 6年 | 全体＊ |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 項目数 | 10 | 10 | 15 | 27 | 27 | 14 | 8 |

この表から、いわゆる学習言語と呼ばれる表現は４年生、５年生での増加が顕著であることが分かる。なお、問題作成に際して、以下のような作業をおこなった。

(1) 項目抽出のとき、教科書の文を分かち書き、漢字表記などできるだけそのまま例文として取り出し、表にリストを作成した。
(2) 適切な問題数に絞っていく過程で、以下のようなことを行った。
・文長の調整のために、例文を変える必要のあるものについて、語彙の難易度を考え同じ文法機能で作り直した。
・学年ごとに適切な問題数になるようにした。
・意味ができるだけ、一文で分かりやすいものを選択した。
(3) 読み上げの速度については、最初の10問は低学年用にゆっくり明瞭な読み方としたが、それ以降は自然な話速度とした。
(4) 練習問題を10問表紙につけた。
(5) できあがった問題を筑波大学の留学生に試用した。
(6) 日本語母語話者の小学生に試用した。

資料１は、このようにして作成した年少者用SPOTの文法項目を示したものである。この問題を留学生に試用したところ、上級レベルの日本語学習者（JLPTのN１程度）の10名は32点中28点から32点、中級レベルの学習者（JLPTのN２ないしN３程度）の７名は20点から28点であり、日本語能力を識別することが確認できた。また、日本語母語話者の小学１年、３年、５年の各１人に試用したところ、１年生も集中して取り組み、この形式の問題が小学校低学年から利用ができることが分かった。それぞれの結果は21点、32点、31点であった。

## ３．年少者用SPOTの実施

作成した年少者用SPOTが、多言語背景にある児童生徒にとって有用なものかを知るために、日本の取り出し学級およびインターナショナルスクールで実施した結果について述べる。

### 3．1　取り出し学級における実施

Ｉ県の公立小学校において、週に３回、取り出し授業を受けている小学校４年生１人（以下A）と５年生２人（以下B、C）に試行した。長期にわたり指導を行っている講師によると、３人とも生活言語としての日本語は比較的問題は少ないが、学習言語に関しては遅れが見られるとのことであった。

SPOTの得点は、Aは32点中21点、Bは13点、Cは27点であった。Aは家庭ではスペイン語であり、一時帰国したとき以外は日本の学校に在籍している。漢字、教科学習能力の面で学習支援が必要とのことで、３年生から取り出し学級で指導を受けている。Bは、日本生まれであり家庭ではスペイン語。音読や、文章の読み取りが苦手である。Cは家庭での言語は日本語と思われる。３年生の春に編入しており、生活言語の面では母語話者とほとんど変わらないが、特に算数が苦手で取り出し学級で指導を受けている。(前述した講師談)

### 3.2　インターナショナルスクールにおける実施

#### 3.2.1　実施校の概要

Ｉ県にある国際バカロレアの認定校で、Pre-K（３才児）～５年生の初等教育課程（Primary Years Program：以下PYP）と、６年生～10年生中等教育課程（Middle Years Program：以下MYP）がある。教育内容は国際バカロレアの基準に則っている。各学年１クラス、１クラス定員最大16名の小規模校であり、校内の第一言語は英語で、日本語は全員が必修である。児童生徒の国籍は多様であり、また二重国籍の者もいるため、児童生徒自身の国籍について触れることは難しい。保護者の国籍で大まかに分類すると、約４割が共に日本国籍の両親、約３割が日本国籍と外国籍の両親、約３割が共に外国籍の両親である。しかしながら、例えば、共に日本国籍の両親であっても外国で生まれ育った児童生徒や、共に外国籍の両親であっても日本で生まれ育った児童生徒もいるため、一様ではないが、児童生徒は外国と何らかの関わりを持っている。そのため、日本語能力や日本語使用環境、日本語学習のニーズは多種多様であり、日本語力はニアネイティブの生徒が多数を占める。

試行時、日本語授業はPre-Kは週１コマ、Kinder（５才児）～５年生は週２コマ、６～10年生は週５コマであった。さらに６～10年生は国際バカロレアの規定に則り、言語Ａ（母語話者レベル）と言語Ｂ・段階１～６（非母語話者レベル）に分かれていた。授業で使用する教材は、日本語教科書、国語教科書、一般書籍、独自開発教材など様々で、読む、書く、聞く、話すという４技能の他、日本語の語感、背景や一般常識（伝統、文化、価値観など）なども扱っている。

#### 3.2.2　調査の実施概要

2013年12月から2014年１月にかけて、２年生から10年生（６歳～16歳）の75名を対象とし実施した。インターナショナルスクールの性質上、日本の学年齢では小学校１年生から高校１年生に相当する。試行時、１年生はひらがなの習得が終了しておらず、用紙版に記入しての解答が不可能であったため、試行対象からは除外した。実施はクラスごとに集団式で一斉に行った。問題数は、２年生は負担を配慮して初めの10問、３年生以上は全32問を実施した。テストに要した時間は、32問の場合練習問題を入れて10分弱である。

3. 2. 3　結果１：正答率および識別力

２年生は10点中最低点は０点、最高点は10点。３年生から10年生は、最低点は０点、最高点は32点であった。全体の各問題の正答率を図１に示す。これは、問題番号順となっており、３桁の１桁めの数字は、教科書の学年になっている。正答率を見ると、学年が上のほうが難しい問題が多くなる傾向が見られる。

項目別識別力は、最低でも0.49であり、とくに悪い問題となるような項目はなかった。識別力の上のほうから２問、下のほうから２問を以下に示す。

問題16　テレビは私たち（に）とって、とても身近なものです。（４年生の教科書）

正答率　0.76　　識別力　0.85

問題３　じゃんけんの　グーは、石（を）　あらわします。（１年生の教科書）

正答率　0.83　　識別力　0.84

識別度が比較的高くない問題

問題13　祭りなら、たいこや笛の音がしそうな（も）のだ。（４年生の教科書）

正答率　0.85　　識別力　0.49

問題15　学習を通（し）て知ったことや感じたことをふり返る。（４年生の教科書）

正答率　0.75　　識別力　0.51

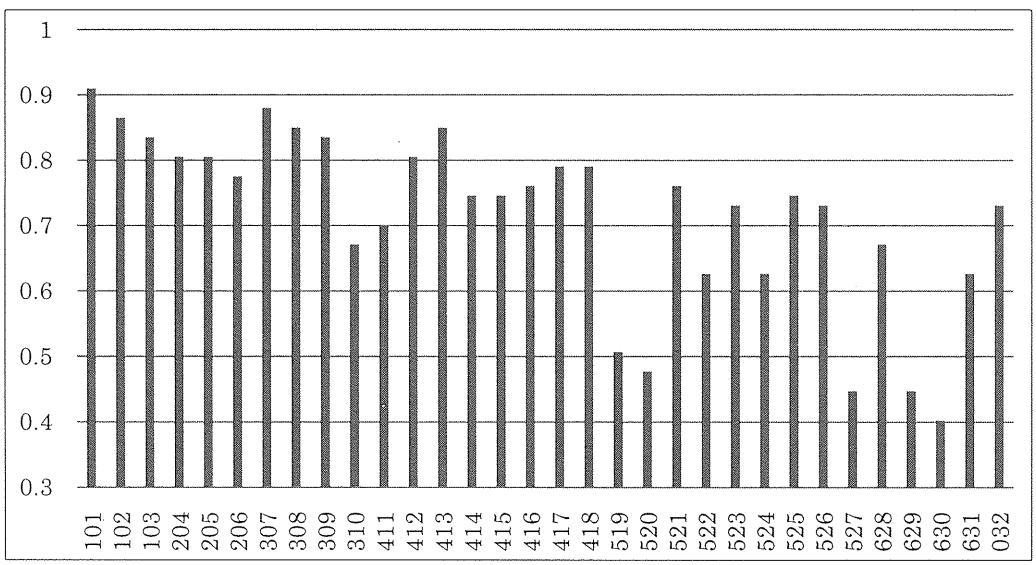


図１　全問題項目の正答率

3. 2. 4　結果２：SPOT得点が表わす日本語力

SPOTの得点結果が何を表すかを知るために、担当教師の各児童の日本語力に関する総合評価を基準にして検討を行った。日本語力は、日常の授業観察、提出課題、評価課題な

どを利用して総合的に判断した。

2年生～7年生は各学年ごとに、8年生から10年生は複式授業を行っており3学年まとめて検討する。まず、教師の日本語の総合評価の順に児童・生徒を並べ、それぞれSPOTの得点について考察を行う。以下の図2～図8の横軸は児童・生徒を総合評価の低い方から高い方へと配列してあり、縦軸はSPOTの得点である。

1） 2年生

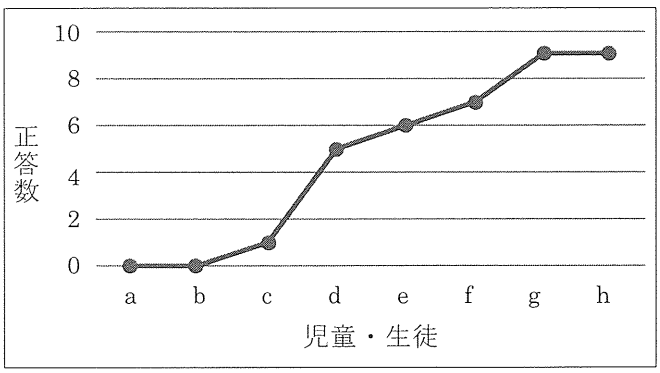


図2　日本語力とSPOT正答数（2年生）

2年生に対しては、1番から10番まで10点満点でSPOTを実施した。問題文は1年から3年までの教科書に基づくものである。図2のaとbの児童は、共に日本語が未習の状態で9月に入学し、調査時点では4か月たったところである。ひらがなやカタカナの定着が不十分であり、解答が困難であった。cは生活語彙としては単語を並べての会話や意志疎通は可能であるが、学習言語としての日本力は不十分である。dは生活に支障のない程度の日本語能力は身についているものの、時折学習言語の面では、不十分な場面が見受けられる。f～hは母語話者とほぼ同等の力を持っている。以上から、2年生の段階では、10問中5問以上正答であれば実施校における日本語授業に支障がなく、7問以上で学年相当の内容を十分理解できると考えられる。

2） 3年生

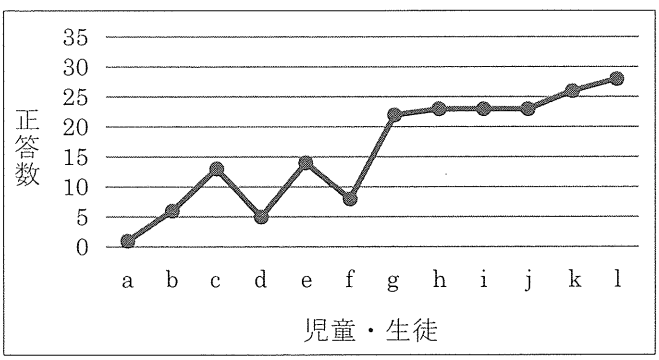


図3　日本語力とSPOT正答数（3年生）

3年生以上は32点満点である。aの児童は前年9月にゼロ初級者で入学し、調査時点では、まだひらがなやカタカナの定着が不十分であった。bとcは手助けがあれば日本語授業の内容を受容できる段階にある。dはbやcと比べると語彙が豊富で語をつなぎ合わせての産出が可能であり、意思疎通ができる段階であるが産出時には文

法の誤りも多い。eは多言語話者である。fからlの児童は日本語母語話者とほぼ同等の日本語力があり、日本語授業への参加や理解には問題がない。その中で、fはSPOT得点が極端に低い。その理由として、性格が影響していると推察する。学習活動において常に慎重であり、特に書く作業において活動への取り掛かりに時間がかかることが多い。そのため、SPOTのように次々と問題が読み上げられ解答を書くことが求められる問題では総合力で判断されるような得点が取れなかったと考えられる。

3）4年生

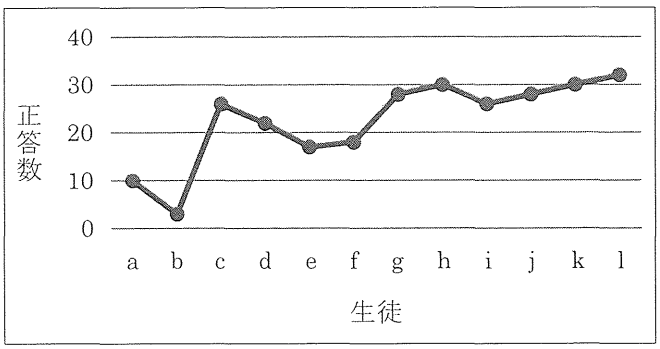


図4　日本語力とSPOT正答数（4年生）

aとbの児童は助けがあれば日本語授業の内容を受容できる段階にある。cは多言語話者で日本語学習の時間は短いが日本語学習に対するモチベーションが非常に高い。dは生活に支障のない日本語能力は身につけているものの、学習言語としては不十分である。eは語彙力と漢字力が当学年の学習に比べて不足している。fからlは母語話者レベルであり、実施校の日本語授業への参加や理解には問題がない。この中で、fは得点が低いが、その理由として、何事にもスローペースである性格が正答数に影響したと推測される。

以上から3・4年生では、5問以上正答であれば助けを得て日本語授業を理解でき、20問以上であれば実施校の日本語授業に支障がなく、25問以上であれば学年相当の内容を十分理解できると考えられる。

4）5年生

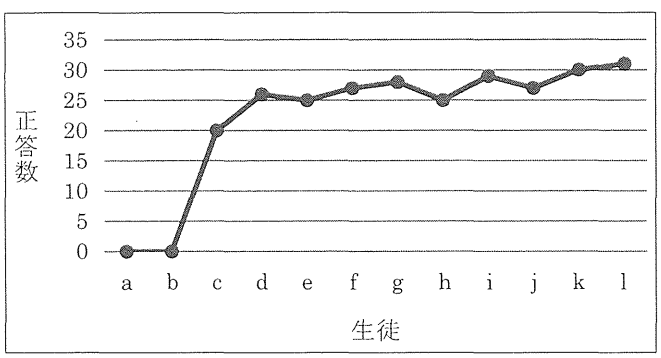


図5　日本語力とSPOT正答数（5年生）

aとbの児童は前年9月にゼロ初級者で入学した児童で、ひらがなやカタカナの定着が不十分であり、解答が困難であった。c～hは母語話者レベルであり、実施校の日本語授業への参加や理解には問題がない。cの正答数が他の児童より低い理由として、学習の理解や活動の取り掛かりに時間がか

かる性格の影響が推測される。またhが低いことの理由として、非常に慎重でスローペースである性格が正答数に影響したと推測される。

5年生では、正答が20～25問以上であれば助けを得れば日本語授業を理解でき、25問以上で実施校の日本語授業に支障がなく、30問以上で学年相当の内容を十分理解できると考えられる。

5） 6年生

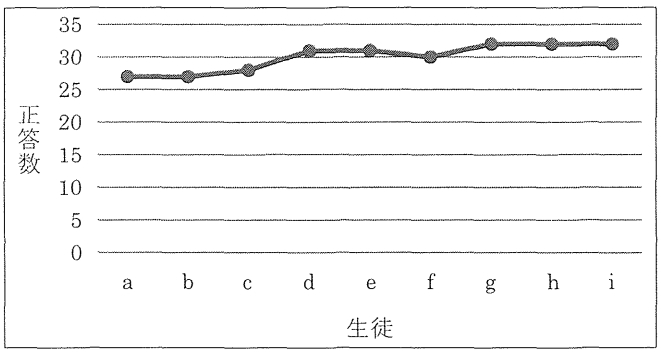


図6　日本語力とSPOT正答数（6年生）

6年生は全員実施校の日本語授業への参加や理解には問題がない児童である。そのため、SPOTの得点は全員高く天井効果のような結果となった。

6年生では、25問以上正答で実施校の日本語授業に支障がなく、30問以上で学年相当の内容を十分理解できると考えられる。

6） 7年生

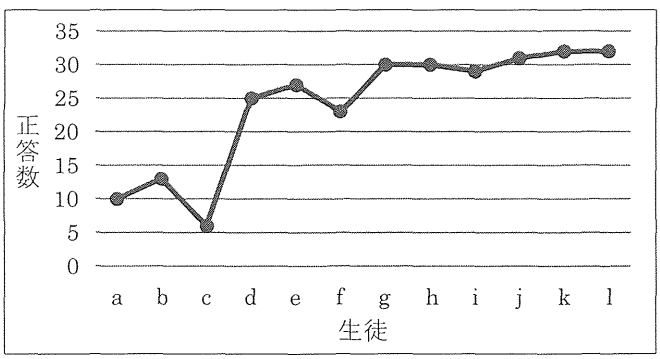


図7　日本語力とSPOT正答数（7年生）

a～cの生徒は9月にゼロ初級者で入学してきた生徒で、解答が困難であった。d～fは母語話者に近いレベルであり、実施校の日本語授業への参加は、さほど問題ないが、基礎的な日本語能力が抜けていたり語彙が不足していたりして理解や定着に関しては不十分である。g～lは母語話者レベルであり、実施校の日本語授業への参加や理解には問題がない。正答数が低いことの理由として、学習の理解や活動の取り掛かりに時間がかかる性格の影響が推測される。以上から7年生では、5以上正答で助けを得れば日本語授業が理解でき、25問以上で実施校の日本語授業にほぼ支障がなく、30問以上で学年相当の内容を十分理解できると考えられる。

7）８～10年生

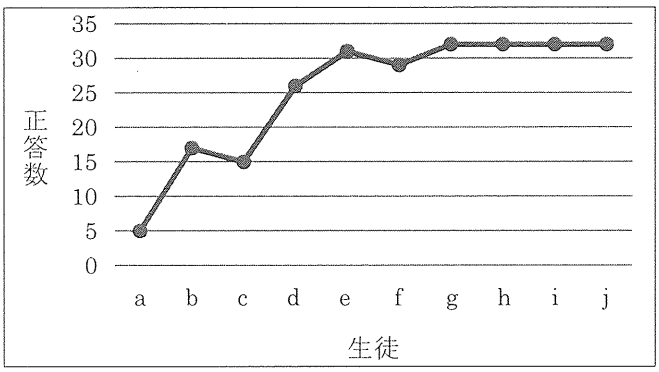


図８　８～10年生

８～10年生の３学年分をまとめたのが図８である。a～cの生徒はゼロ初級で入学した生徒であるが在学年数によって差が出てきている。dは母語話者に近いレベルであり、実施校の日本語授業への参加はさほど問題ないが、基礎的な日本語能力が抜けていたり語彙が不足していたりして理解や定着に関しては不十分である。e～jは母語話者レベルであり、実施校の日本語授業への参加や理解には問題がない。以上から８～10年生では、５～20問正答で助けを得れば何かしら日本語授業を理解でき、25問以上正答で実施校の日本語授業に支障がなく、30問以上で学年相当の内容を十分理解できると考えられる。

表２に以上で検討した日本語力を、表にまとめる。

表２　各学年の正答数と実施校における日本語授業の理解度

| 学年 | 満点 | 助けを得れば理解できる | ほぼ支障なく理解できる | 内容が十分理解できる |
|---|---|---|---|---|
| ２年生 | 10問 | ３～ ４ | ５～ ６ | ７～10 |
| ３年生・４年生 | 32問 | ５～19 | 20～24 | 25～32 |
| ５年生 | 32問 | ５～19 | 20～30 | 31～32 |
| ６年生～10年生 | 32問 | ５～24 | 25～30 | 31～32 |

## ４．まとめと今後の課題

テストには、完璧なテストはなく、ある時点・ある側面の評価であり、どのような目的でテストを行うか、どのように結果を利用するかをよく考えて実施することが重要である。

今回のインターナショナルスクール等における試行から、年少者用SPOTが７歳～15歳の児童生徒の日本語力の測定に利用できることがわかった。10分間以内という短時間で集団での実施が可能であり、かつ、教師に専門的な日本語教育の知識がなくとも実施できることは、受験者にも実施者にも負担が少ない。もちろん対面式の診断や測定と比べて、測ることのできない部分も多いが、本テストを事前に実施し、さらに精度の高い調査を必要とする児童・生徒を見つけ出す使い方も有効であろう。

また、学年ごとに総合評価の日本語力を順に並べたところ、総合評価に比べてSPOTの得点が低い児童・生徒が複数見られた。受験時の観察やテスト後の感想から、慎重な性格だったり、全体的にのんびりとした性格で字を丁寧に書くために速度に追いつけないケース、間違うことを恥ずかしく思い誤答よりは空欄にすることを選ぶケースなどがあった。このような性格や行動パターンの要因も考慮したうえで、テスト結果を判断し使用する必要があろう。

今後の課題を以下にあげる。

(1) 時間、空間を問わずに実施ができるオンラインテストに対する要求は強い。留学生対象のSPOTを2014年9月よりオンラインテストとして公開したところ、国内外から広く利用されている[2)]（酒井・加納・小林2015）。年少者対象には、正誤を音声や画面に表示するなど、成人用とは異なる楽しい雰囲気でモチベーションを高める工夫を加えたテスト開発を進めたい。

(2) 日本語母語話者の児童・生徒に実施し、多言語背景の児童、生徒の比較検討のための資料としたい。

(3) 受験者数を増やして、さまざまな多言語背景のケースを分析する。また問題項目に関する項目分析も行い、その特徴を明らかにする。

(4) 今回は学習言語に焦点を当てて、問題作成を行ったが、海外の初中等教育でのJFLを対象とする教育者、研究者からは、学習言語だけでなく生活言語のSPOTの要望も寄せられた。今後の課題としたい。

## 謝辞

年少者用オンラインテストの開発研究グループのメンバーである甲斐晶子、加納千恵子、清水秀子、関裕子、田中裕祐、李在鎬の各氏には、会議の折に貴重な意見をいただいた。またテスト受験および実施に協力してくださった方々に感謝の意を表したい。

## 注

1．外国人児童生徒のためのJSL対話型アセスメントは以下のURLからダウンロードが可能である。
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2014/03/20/1345383_1.pdf（2014年12月2日）

2．SPOTのオンラインテストは筑波日本語テスト集（TTBJ）の中から受験することができる。URLは以下を参照のこと
http://ttbj.jp/

## 参考文献

川上郁雄（2003）「年少者日本語教育における『日本語能力測定』に関する観点と方法」『早稲田日本語教育研究』2：1-16

小林典子・フォード順子（1992）「文法項目の音声聴取に関する実証的研究」『日本語教育』78号：167-177

小林典子・フォード順子・山元啓史（1996）「日本語能力の新しい測定法『SPOT』」『世界の日本語教育』6号：201-218

小林典子・酒井たか子、フォード丹羽順子（2007）「即時要求型言語テストのWEB化－SPOT-WEBの場合－」CASTEL-J in Hawaii 2007 Proceeding

小林典子（2008）『言語テストSPOT-WEB版の開発と解答行動の研究』研究成果報告書(1)(2)科学研究費補助金　基盤研究（B）筑波大学

酒井たか子・小林典子（1999）「SPOTから見た日本語L1児童の日本語力」『日本語教育方法研究会誌』Vol.6 No.2：38-39

酒井たか子（2011）「SPOTによる日本語能力の測定（2）―プレースメントテストとしての利用―」『異文化間コミュニケーションのための日本語教育』中国・天津：500-501 世界日語教育大会

酒井たか子・加納千恵子・小林典子（2015）「TTBJ（Tsukuba Test-Battery of Japanese）」李在鎬編『日本語教育のための言語テストガイドブック』：86-109

東京書籍（2011）『あたらしいこくご一下』『新しい国語二下』『新しい国語三下』『新しい国語四下』『新しい国語五下』『新しい国語六下』

中島和子（2003）「学校教育の中でバイリンガル読書力を育てる-New International SchoolにおけるDRA-J読書力テストの開発を通して－」『母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）研究』第2号：1-31

資料　年少者用SPOTのリスト

| 学年 | 問題番号 | 文法項目 | 問題とした部分（　） |
|---|---|---|---|
| 1年生 | 1 | ための（目的） | さかなを　とる　ため（の）＊1 |
| 1年生 | 2 | と（引用） | ～（と）わかった |
| 1年生 | 3 | を（対象） | グーは、石（を）　あらわします |
| 2年生 | 4 | たらさい後（接続） | ～飲んだりした（ら）　さい後、 |
| 2年生 | 5 | もとに（接続） | メモに　書いた　ことを　（も）とに |
| 2年生 | 6 | 連用中止 | そうぞう（し）、　お話を　作りましょう。 |
| 3年生 | 7 | さらに（副詞） | 練習しながら、さら（に）くふう |
| 3年生 | 8 | たところ（接続） | 本で調べた（と）ころ、～とありました |
| 3年生 | 9 | とのこと（引用） | ～ているとの（こ）とでした |
| 3年生 | 10 | より（副詞） | 物語を（よ）り深く味わう |
| 4年生 | 11 | 一方（接続） | 大型化する（い）っぽう＊2、弱い風でも動くよう～ |
| 4年生 | 12 | ～におうじた | 課題に（お）うじた方法で |
| 4年生 | 13 | ものだ（ムード） | ～しそうな（も）のだ |
| 4年生 | 14 | である | 健康の基本（で）ある食事 |
| 4年生 | 15 | 通して（複合助詞） | 学習を通（し）て知ったこと |
| 4年生 | 16 | にとって（複合助詞） | わたしたち（に）とって |
| 4年生 | 17 | によって（複合助詞） | 種類に（よ）ってちがいます |
| 4年生 | 18 | もとづく | 日本の習慣に（も）とづくもの |
| 5年生 | 19 | がち（接尾） | 錯覚におちいってしまい（が）ちです |
| 5年生 | 20 | うえで（目的） | 出来事や動きを知る（う）えで |
| 5年生 | 21 | に（目的） | お湯をわかす（に）も火が必要です。 |
| 5年生 | 22 | かかす | （か）かす＊2 ことのできないもの |
| 5年生 | 23 | との（助詞＋助詞） | 地いきのお年寄り（と）の交流。 |
| 5年生 | 24 | なくとも（接続） | きずつける意図はなくと（も） |
| 5年生 | 25 | にもかかわらず | 同じものであるにもかかわら（ず） |
| 5年生 | 26 | 自他 | ～は日増しに高（ま）るばかりです。 |
| 5年生 | 27 | ふまえて | この構成を（ふ）まえて |
| 6年生 | 28 | わたって | 長期間に（わ）たって |
| 6年生 | 29 | への（助詞＋助詞） | 地球環境（へ）の悪影響 |
| 6年生 | 30 | ざるをえない | 思わ（ざ）るをえません |
| 6年生 | 31 | 関わる | 学習してきたことと関わらせて |
| 全体＊3 | 32 | 可能 | よく分かってもらえるかを考え、 |

＊1　1年生と2年生の問題文は教科書にならって分かち書きとした。
＊2　「一方」「欠かす」は教科書では漢字表記であるが、問題とするため「いっぽう」「かかす」と仮名書きとしてある。
＊3　全体としたのは、どの学年にも出ている構文で、例えば、連体修飾構文、受身文、可能文などである。